

2026.04.12.

「私もあなたを罪に定めない」

旧約 申命記 2 章 22～24 節

新約 ヨハネによる福音書 8 章 1～11 節

1. はじめに

今朝与えられている御言葉には、【姦通の現場で捕らえられた女性がイエス様の御前に連れてこられ、律法学者やファリサイ派の人達によってイエス様が試された場面です。その時イエス様は「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい。」と人々に告げられ、これを聞いた人々は一人また一人と去って行き、誰もいなくなった。そして、イエス様は「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない。」と告げられた】という出来事が記されています。とても有名な話です。ただ、この話は[]で括られています。これは、この話が元々のヨハネによる福音書には無かったと考えられるということを示しています。しかし、それはこの話が根拠のない作り話であるということ意味しているわけではありません。確かに、5世紀以降のヨハネによる福音書の写本から、この話はヨハネによる福音書のこの場所に記されることになっているわけですが、それ以前は別の形で教会に伝えられていたことが知られています。そして、この出来事はイエス様がどのようなお方であるかということ、私共によく示しています。そして、代々の教会はイエス様と私共との関係をこの記事から受け止めてきました。私共はこの出来事を通して、「私共の罪」、「私共の裁き」、またイエス様による「罪の赦し」、というものをしっかり受け止めたいと思います。

2. 姦通の女性

さて、イエス様は神殿の境内で人々に教えておられました。そして、そこに「律法学者たちやファリサイ派の人々が、姦通の現場で捕らえられた女を連れて来て、真ん中に立たせ、8:4 イエスが言った。『先生、この女は姦通をしているときに捕まりました。』」皆さんは、この場面をどのように思い描くでしょうか。今風にいえば、浮気の現場で取り押さえられた女性が、たくさんの人々がいる神殿の境内に連れてこられたということです。「姦通の現場で捕らえられた女」ですから、あられもない格好をしていたと考えて良いでしょう。ちゃんとした身なりなどしていません。この女性は恥ずかしさに、顔を上げることも出来なかったでしょう。浮気の現場で取り押さえるなどということは、そうそう出来ることではありません。ということは、この機会を狙って誰かが監視でもしていたのでしょうか？何とも可哀想な気がします。しかし、この女性がしたことを「仕方がないこと」として不問にすることは出来ません。先ほど読みました申命記 2 章 22 節には「男が人

妻と寝ているところを見つけられたならば、女と寝た男もその女も共に殺して、イスラエルの中から悪を取り除かねばならない。」と記されているからです。聖書は性の問題については、とても厳しいのです。それは、性行為を夫婦の契約における信頼、人格的な結びつきを示すものとして大変重要に考えているからです。キリスト教も同じです。

ここで私が気になることは2点あります。一つは、どうして相手の男性はここに居なかったのか？ということ。何とも不自然な気がします。相手の男性は逃げたのでしょうか。そもそも、この女性がイエス様を陥れる為に引き出されたのなら、これはこの女性にとって仕組まれた罠だったのかも知れません。そうでなければ姦通の現場を押さえるなんて出来ないでしょう。更に言えば、この女性はそのようにして生活の糧を得ていた女性だったのかもしれない。

もう一つ気になることは、この女性を人々の前に引き出した人達は、少しもこの女性に対して同情していない。可哀想にとっと思っていないということです。この女性のしたことを不問にしないで、こんなたくさんの人々が居る前に連れて来て、さらし者にする必要があったのでしょうか？この感覚にちょっとついて行けない思いがいたします。

3. 私共の裁き

どうしてこんなことが出来たのか？それは、彼らにとってこの女性のことなど眼中になかったからです。問題はイエス様を陥れることが出来るかどうか、それしかありませんでした。彼らはイエス様にこう問います。「こういう女は石で打ち殺せと、モーセは律法の中で命じています。ところで、あなたはどうお考えになりますか。」ここでもイエス様がこの女性を赦すとすれば、「イエスは律法をないがしろにしている。」と言って、イエス様を糾弾したでしょう。また、イエス様がこの女性は死刑に処されなければならないと言えば、「イエスには愛がない。」或いは「イエスは死刑の権限はローマにしかないのに、ローマに反乱を企てる者だ」と言って非難したに違いありません。どちらにしてもイエス様は、律法学者やファリサイ派の人達によって陥れられる。そういう巧妙な罠でした。ですから聖書は「イエスを試して、訴える口実を得るために、こう言った」と告げているわけです。つまり、彼らは既にイエス様とこの女性を社会的に葬り去ることにしていた。つまり裁いていたわけです。そして、どちらの結論になろうと、自分達の正しさは揺らぎません。自分を正しいところに身を置いて、他者を裁く。これが私共が他人を裁くときの姿です。この出来事の中でイエス様が問題にされているのは、この姿勢です。自分は正しいところ、一段と高いところに身を置いて、他の者を裁く。これが本当に正しい裁きなのか？ということ。です。

私共はここで、「律法学者やファリサイ派の人達はなんとひどい人達なのか」と言って、責めるわけにはいきません。私共もまた、この時の律法学者やファリサイ派の人達と同じように他人を裁くことが良くあるからです。「評論家のような物言いをする」という言葉があります。これは評論家

を貶めているところがあるかもしれませんが、要するに「自分では少しも労苦せず、高みの見物を決め込んでいて、あれはダメだ、こうしなければ良くない、そんなことばかり言っている人」のことを指している言葉です。自分は少しも当事者では無いわけです。どうなっても自分は困らないし、被害を受けない。それで本当にそれで良いのかということです。

4. 無実者が裁け

イエス様はこの時どうされたのでしょうか？「**イエスはかがみ込み、指で地面に何か書き始められた。**」とあります。この時、イエス様が地面に何を書かれていたのか、昔から際限の無い議論が為されてきました。「神は愛なり」と書いていた言う人も居れば、「互いに愛し合いなさい」と書いていたという人も居ます。何を書いていたのかには意味が無いのであって、「へのへのもへじ」と書いていたと言う人も居ます。聖書には何を書いていたのか記されていないのですから、正解はありません。ですから、イエス様がこの時何を書いていたのか論じることはあまり意味がありません。大切なことは、この時イエス様は指で地面に何かを書くために「視線を落とした」ということです。イエス様は好奇の目にさらされている、この女性から視線を外したということです。それは、こう言っても良いででしょう。イエス様はこの女性の上に立って、この女性を裁くという場所から退かれたということです。彼らと同じ所に立たなかった。律法学者やファリサイ派の人達だけではありません。イエス様の教えを聞いていた人たちも、この女性に好奇の目を向け、イエス様が何と言われるのか注目していたことでしょう。この女性をどのように裁くのか、皆が注目していました。しかし、イエス様はこの誰一人この女性に寄り添おうとしない人々が作り上げた「裁きの場」から降りられたということです。

そして、こう告げられました。「**あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい。**」イエス様は「**あなたたちの中で罪を犯したことの無い者**」と言われました。こんな人が居るのでしょうか？このイエス様の言葉には、幾つもの意味があったと思います。第一に「あなた方の中に罪を犯したことの無い人が居ますか？居ないでしょう。それなのに、どうして自分は罪の無い者であるかのように、この人を上から見下ろしているのですか？」という意味。第二に、イエス様は「本当に罪を犯した人を裁くことが出来るのは、全く罪を犯されない神様しかいないではありませんか？あなたたちにそれが出来ますか？」という意味。そして、第三に「私は罪を犯すことの無い神の御子です。私はこの人を裁くことが出来ます。しかし、この人を裁くということは、罪を犯している全ての人、つまりあなた方をも裁くということです。それで良いのでね。」そのような意味があったのではないかと思います。イエス様はここで「裁き」ということを、「人が人を裁く」というものから「神様が人を裁く」という、裁きの根本的なあり方へと人々の思いを向けさせられたわけです。

しかし、人々はそのようなことは全く考えておりませんでした。人々が考えていたのは、「人が人を裁く」という人間の業としての裁きです。そのような裁きが不要だというつもりはありません。社会の安定のためには、そのような仕組みも必要でしょう。しかし、だからといって自分たちは「罪なき者」「正しい者」として、その社会においてしてはならないことをしてしまった人の上に偉そうに立つことが出来るのか？イエス様はここで、誰も逃れることの出来ない「私の罪と神様の裁き」というものに人々の思いを向けさせられました。

5. 私の罪を知る

このイエス様の言葉を聞いた人々が、どれほど「自分のこと」として罪や裁きというものを受け止めたのかはよくは分かりません。ただ、聖書は「これを聞いた者は、年長者から始まって、一人また一人と、立ち去ってしまい」と告げています。どうして「年長者から」なのか。当時のことから、60歳・70歳代の人達からということでしょう。それは、年配になると、自分の罪というものが若いときよりも少し見えてくる。他人の罪をあげつらうことは、神様の御前に正しいとはとても言えないということが分かってくる。自分は良く分かっていない者だということが、分かってくる。そういうことなのではないかと思います。

私も孫が与えられまして、自分が子育てをしていたときのことを時々思い起こします。良いことはあまり思い出さず、「あの時、こう言ってあげれば良かった」とか「あの時、こうしてあげれば良かった」などということばかり思い起こします。完全な子育てなどありません。良かれと思って言ったことが、子どもの心に刺さって残ってしまっていることもありましよう。挙げていけばきりがありません。子育てに限ったことではありません。人と人が出会って、交わりが生まれてくれば、必ずそこでは「言わなくて良いことを言ってしまった」り、「してはならないことをしてしまった」ということが起きます。いつでも、自分が被害者側とは限りません。後になって、自分の誤解だったと分かることも少なくありません。聞いてみなければ、人の思いというものは分からないものです。聞いてみたところで、それが本当のこととは限りません。人間とは、実にやっかいな者です。それを全てご存じのお方は、神様しか、イエス様しかおられません。私共の裁きというものは、本当に上っ面だけのものです。私は本当のことは、何も知らない。このことを、しみじみと思わされるのです。若いときは、偉そうに、何でも知っているかのように相手を批判し、非難したものです。それが若気の至りというものでしょう。

しかし、それでもなお裁かなければならない時というものがあります。その時、私共はただ神様の憐れみと赦しを求めて決断していくしかありません。それ以外にやりようがありません。ただ「自分の行った決断には間違いはない」などとは、ゆめゆめ思わないことです。私も何度もそのような決断をしなければならなかったことがありました。そして、決断をしてきました。それが本当に良かった

たのかどうか、今でも正直なところ分からないこともあります。しかし、私共はやがて神様の御前に立ちます。その時に、全てが明らかになります。神様は、私はその時はそうするしかなかったことをご存知です。私共は神様のみ前に立つとき、自分が欠けたる者であることを認め、ただ神様に赦しを求めるしかない、そういう者なのです。

6. わたしもあなたを罪に定めない

さて、人々が立ち去っていき、その場にはイエス様とその女性だけが残されました。イエス様はここで身を起こし、この女性を見てこう告げられました。「婦人よ、あの人たちはどこにいるのか。だれもあなたを罪に定めなかったのか」。婦人は答えます「主よ、だれも」。これはとても大切なことです。イエス様とこの女性は二人きりになりました。この会話は、大勢の人達の前で行われたものではありません。イエス様と二人だけの時に為されました。私共が自分の罪を正直に認めることが出来るのは、このイエス様と二人だけの時です。ここで、婦人の口から「悔い改めの言葉」が告げられたわけではありません。しかし、イエス様は分かった。この婦人が、「もうこんな罪を犯さない」と心に決めたことをイエス様には分かりました。そして、イエス様はその心を受け止めました。「悔い改めの心」として受け止められました。

そして、その婦人にイエス様は「わたしもあなたを罪に定めない。」と告げられました。これはイエス様による「罪の赦しの宣言」です。このイエス様の言葉は「十字架の言葉」です。イエス様が十字架の出来事を通して、また十字架の上から、私共一人ひとりに向けて告げられている言葉です。今朝も、イエス様は聖書の言葉を通して私共に告げておられます。「わたしもあなたを罪に定めない」。イエス様が罪に定めないということは、「あなたのために、あなたが受けなければならない罪の裁きを、わたしが十字架の上で受けた。だから、あなたは罪に定められない。」ということです。わたしが罪に定めないので、あなたを罪に定める者は居ない。だから、安心していきなさい。そう、イエス様は告げられているわけです。

7. もう罪を犯してはならない

イエス様は、この女性にたいして「わたしもあなたを罪に定めない。」と言われたわけではありませんでした。続けて「行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない。」と告げられました。イエス様が「行きなさい」と言われたのは、こうしろ、ああしろということではなくて、どのように行くかはこの女性に任されたということでしょう。大切なことは、イエス様の罪の赦しを受けたこの女性は、新しい者とされたということです。イエス様は姦淫を犯したこの女性の罪を無かったことにしたわけではありません。この女性を、罪を赦すことの出来る権威ある者、神様であるご自分の前に立たせ、新しい者にされたのです。新しい命に生きる者にされました。この女性は、

イエス様の罪の赦しの中を生きる者にいただきました。イエス様はこの女性を、新しくされた者として「行きなさい」と言われました。それは、今までと同じ生活に戻って行きなさいということではないでしょう。彼女は、ここから新しい歩みを始めることになります。それは「今までと同じ罪を犯し続ける者ではなく、同じ罪を犯さない者」として生きるということです。勿論、これからこの女性は全く罪を犯さない者になったということではありません。この後も、この女性は罪を犯すこともあるでしょう。しかし、それはイエス様によって罪を赦していただく前と同じ者であり続けた、というわけではありません。罪の赦しを受けた者とは、新しくされた者です。どこが新しいのか、外から見ていては分からないかもしれません。しかし、このイエス様によって与えられた新しさを私共はみんな知っています。キリスト者とは、この新しさの中に生きる者にされた者だからです。それは様々な言い方が出来ると思いますが、神様の御心、イエス様の御心を大切にする者として生きる者となったということ。イエス様と確かな絆で結ばれた者、イエス様の命に生きる者になっちということです。

それはたとえて言えば、こういうことです。私共が、無茶な運転をして、交通事故で死にそうになったときに、私共に代わって、身代わりになってくれた人が居たとします。その人が私に「これからは生きてください」或いは「もう、あんな無茶な運転は止めてください」と言ったなら、私共はきっともう無茶な運転をすることは不会いでしょう。命がけていわれたのですから。イエス様の「**行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない。**」との言葉は、そのようにこの婦人に働いたに違いありません。私共も同じです。今朝、イエス様は私共に「**わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない。**」と告げられました。この言葉をしっかり受け止めて、ここから新しい歩みへと歩み出していきたいと心から願います。

お祈りいたします。

恵みと慈愛に富たもう、全能の父なる神様。

あなた様は今朝、聖書の言葉をもって、イエス様の言葉を与えてくださいました。ありがとうございます。私共はまるで自分には罪がないかのように思い違いをして、平気で他の人を裁いてしまう過ちを犯してしまいます。どうか、私共の愚かさ、傲慢さをきちんと見ることが出来ますように。あなた様は私共の全てをご存じです。私共自身よりも、私共のことを知っておられます。その上で、「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない。」と私共に今朝、語りかけてくださいます。この御言葉を心に宿して、あなた様と共に、あなた様の御前を、御国に向かってしっかり歩いていくことが出来ますように。聖霊なる神様の導きを心から祈り、願います。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン